ともしび

筒　井　友　弥

「ドイツの古城」．1999 年，本学 4 回生のときに私が選んだ卒業論文のテーマである．正直，確固たる理由があってというわけではない．他の学生たちが，ドイツの食べ物やファッションなどを取り上げているのを横目に，少しでも自分の興味のあるテーマをと考えた末のいわば妥協だった．語学，文学，文化の三つのゼミから選択ということで，当時，ドイツ語の文法にもドイツ人の作家にもとりわけ関心のなかった私は，大橋成光先生が担当されていた文化ゼミを履修することにした．多様な文献が山積みにされ，これぞ教授の空間といった大橋先生の研究室で，「ドイツの古城について卒論を書きたいので，何か本を貸してください」と，今思えば，なんとも不躾で意識の低いお願いをすると，先生は「おお，そうかそうか」と徐に一冊の本を手に取り私に差し出した．江村洋著の「カール五世：ハプスブルク栄光の日々」だった．てっきり古城街道か何かの文献を手渡されると決め込んでいた私は，手にした書物を凝視して，きっと自分の意図が通じていないと先生を疑った．とはいえ，「違います．お城についてです」などと抗議するほど，当時の私は熱心ではなく，そこで，一旦素直に家に持ち帰り，後日，今度こそ「古城特集の本でも頼もう」などと失礼で浅はかな考えを巡らせた．帰宅し，何気に頁をめくると，案の定，城に関する記述など皆無に等しく，ただひたすら親しみのない堅苦しい文章が綴られていた．「そもそもカール五世って誰？ ハプスブルク家って何？ 宗教改革？ 30 年戦争？」．脳に溢れ来る疑問符の数々．しかし，気が付くと私は世界に引きずり込まれ，その日のうちに一冊を読み終えた．翌日から，私はハプスブルク関連の歴史の虜になり，そうこうして夏休み明けまもなく卒論を提出した．司教都市ヴュルツブルクに現存するマリエンベルク要塞を取り上げて．その後私は，大橋先生が無言で語っておられたのだと気付いた．「ドイツの古城を知るには，まずドイツの歴史を知らなければならない」．

それから 15 年が過ぎた今，「古城に灯火を」などと勘違いの下手なタイトルをつ

けた卒論を読み返してみると，その内容は，やはりなんとも幼稚でひどいものだ．しかし，その当時の自分が，まるで魔法でもかけられたかのように突如湧き上がる知的好奇心にかられ，論文という作業に没頭する日々を送ったことを，今でもまざまざと思い出す．そして，この卒業論文での出来事こそ，研究者の端くれとしての今の私の出発点であり，物事を多角的に見ることの大切さを学んだ大きな転換期である．

5 年間と短い間であったが，本学ドイツ語教員の同僚として大橋先生と触れ合う機会に恵まれ，先生は常に，キャンパスでも校外でも私を気遣ってくださった．とりわけ，奉職当初，誰ともなく一人で昼食を取っていた私を，先生は優しく大学近くの食事処にお誘いくださり，私の心の拠り所となってくださった．また，特にドイツの政治についてお話しされるとき，先生はいつも朗らかなお顔をされ，先生の本当に楽しそうで穏やかな口調が印象的だった．失礼を承知で，あえて学生たちのことばを借りれば，時同じくして，今年引退を表明した日本を代表する某アニメーション作家にそっくりの先生のご風貌は，学生のみならず，いつも私の心を和ませてくださった．研究棟の廊下に，大橋先生の部屋の灯が消えるのは，寂しいとしか言いようがない．しかし，先生のお力添えで灯された「古城の灯火」は，この先，常に私の初学の灯として煌々と輝き続け，今後の教育者として，研究者としての私の道を照らし続けてくれるに違いない．